

理工学部研究報告 50 年記念号の発刊に向けて  
安藤義則<sup>1)</sup>

For the 50<sup>th</sup> Anniversary Publication of Research Reports of  
the Faculty of Science and Technology, Meijo University

Yoshinori ANDO<sup>1)</sup>

Abstract

This is the foreword for the 50<sup>th</sup> anniversary publication of Research Reports of the Faculty of Science and Technology, Meijo University. This article gives a historical overview of our Faculty, pointing out the significant roles of the Research Reports.

理工学部研究報告の 50 号の記念号ということで、巻頭言を書かせていただく荣誉に浴しております理工学部長を勤めさせていただいています安藤です。

50 年というのは、長くて重い年月です。最初の 15 年間は、私自身にとっても空白の期間ですから、少し調べさせていただきました。名城大学の創立 83 年の歴史はそのまま理工学部の歴史と言えるわけですが、新制大学の理工学部として発足したのは昭和 25 年 (1950) と聞いています。したがって、新制理工学部発足から 10 年経ったときに理工学部研究報告の第 1 号が発刊されたことがわかります。理工学部応接室に掲げられている歴代理工学部長の写真で確認しますと、その発刊当時の理工学部長は、小澤久之丞教授であることがわかります。創立者の田中理事長との間の学園紛争の最中であつたということになるのでしょうか。校舎も今の附属高校のある中村校舎にあつたということで、現在の天白校舎に移転したのはその後の昭和 42 年 (1967) とのことです。

理工学部を構成する学科の方も、昭和 40 年代の前半に土木工学科と建築学科の分離独立と、交通機械学科の新設がなされて 6 学科として確立されてから、30 年以上経過したところで、大きく見直されることとなります。そして、平成 12 (2000) 年 4 月にいわゆる 6 条改組のもとに、情報科学科 (平成 16 年に情報工学科に変更)、材料機能工学科、環境創造学科の 3 学科が加わり 9 学科として発足して、ちょうど 10 年が経過しようとしています。現在、時代の趨勢で建設システム工学科の定員削減が必須の条件になり、さらに見直すための改組・再編の議論が進んでいます。

この理工学部の発展と呼応して、理工学部研究報告もその存在意義を高めてきています。理工学部の構成員の研究発表の場としてのみならず、修士課程あるいは博士

課程の大学院学生や共同研究の研究員の研究発表の場としても役立てられています。しかし、理工学部研究報告に記載された論文は、教員の資格審査の際の論文数としては、カウントできないということがあって、そのことを考慮した投稿がなされていることも確かで、否めない状況です。したがって、それなりの活用が望まれる所です。それを受けて、最近では、退職される先生方や新任の先生方ご自身の紹介の場としても利用されるようになってきています。

雑誌の形態は、30 号の頃までは B5 サイズでしたが、その後、時代の趨勢で、A4 サイズと大判になり、2-3 年前からは雑誌体での印刷はなくなり CD-ROM としての発刊のみとなっています。この理工学部研究報告も、時代に沿った変遷がなされてきているということになります。ただし、私のように旧い者にとっては、雑誌体の印刷物がないというのは、とても寂しくも感じられます。

最近では、大学評価ということがいろいろの面で言われるようになり、平成 20 年には「大学基準協会」によって、大学全体としてその評価を受けて、『適当である』との認定を受けています。また、理工学部では、5 年前から技術者教育認定機構から、学科単位でいわゆる JABEE 認定を取得しています。今年中には、工学系の 7 学科がそれを受審することになります。さらに、名城大学自体も 2015 年までの中・長期目標を打ち立てて、それに向けて PDCA サイクルを回していくための戦略として MS-15 を作成しています。その MS-15 の理工学部版も毎年作成して検証していく必要があるわけですが、そういったときに役立つ理工学部全体としての各種のデータを含めた報告集としても、理工学部研究報告を今以上に活用できるようにしていただけることを期待しています。

1) 理工学部長、材料機能工学科

1) Dean of Faculty of Science and Technology, Department of Materials Science and Engineering